

左半側空間無視患者に対する前庭系賦活の有用性

文字フォント：明朝体

文字サイズ：演題名 12ポイント

所属・氏名、本文 10.5ポイント

1行空ける。

兵庫県学会病院 ○作業太郎 作業花

1行空ける。

【はじめに】

近年、前庭系賦活による左半側空間無視の改善が報告された。【はじめに】などの小見出しを付ける。

発表者が複数の場合、筆頭発表者名の前に○を付ける。

なった。

の適応に関しては実用的でないことも指摘されている。そこで今回、前庭系賦活に着目し、重度の左半側空間無視を呈する症例への効果を検討し、無視症状の軽症化を報告する。

抄録：A4用紙1枚、Word文書（Windows 2003Ver以降）で作成。

余白：上下：20mm、左右：20mmで設定。

本文：2段組とし、各段の文字数は22字程度、行数は38行程度。

びついたので若干の考察を加え報告する。尚、発表に際し、本人と家族より同意を得ている。

次に前庭脊髄路系の賦活へ向けて端坐位で体幹の伸張、左右への重心移動を誘導し感覚の統合

を促進し、非麻痺側の感覚知覚が出現

した。

移動が出現

した。

【症例紹介】

原則として、倫理的配慮に関する記載が必要。

ことで、移乗の介助量軽減に繋がった。

70歳代男性。診断名：右急性硬膜下血腫術後・脳挫傷。現病歴：X月Y日転倒受傷、X+1月+5日血腫の拡大を認め穿頭血腫除去術施行、X+2月+2日当院転院。既往歴：50歳代に脳梗塞、左片麻痺（杖歩行自立）。

【結果】

線分抹消試験で改善を認め、線分二等分試験、時計描画試験は若干の改善であった。ADL：

句読点注意！ . と、で統一する。

が軽介助、方向転換が中等度介助となった。車いすでの食事が可能となったが左側の食べ残しは残存した。

画像所見：頭部CTで両側前頭葉、右頭頂葉・後頭葉に脳挫傷後の低吸収域を認めた。

図表は必要に応じて挿入。

印刷時に不鮮明にならないよう注意。

【考察】

前庭覚、聴覚、頸部の固有感覚、視覚の多重感覚の統合が空間での身体適応のために重要であり（Karnathら2006）、また無視の回復には左方探索の出現と病識の獲得が必要である（石合1996）。本症例も感覚の統合を積み重ね、空間での身体適応を得ることでPusher現象が軽減し、左身体からの感覚知覚が可能となり移乗の介助量軽減や左方探索の出現に繋がったと考える。

【作業療法評価】

左 Br.stage：上肢Ⅲ・手指Ⅳ・下肢Ⅲ。触覚・位置覚：重度鈍麻。左同名半盲。机上検査で重度の左半側空間無視。病態失認。HDS-R：14/30点。ADL：ほぼ全介助状態（FIM26/126点）、食事はベッド上でスプーンにて可能だが、左側の食器の見落としあり。Pusher現象を認め、車いすから降り落ちる事が多く特に移乗動作は重度介助。

【参考文献】

【治療内容と経過】

文献は必要時に記載。

車いす坐位で正中位に棒を垂直に立て、棒の左右を覗くように重心移動を誘導した。これに対し強い抵抗を示したため背もたれへの適応を促し、狭い範囲から徐々に運動を拡大し前庭入力、体幹・頸部の固有感覚と視覚を統合すること

Karnath H-O, Dieterich M : Spatial neglect and vestibular disorder?. Brain129:293 - 305, 2006.

石合 純夫：半側空間無視の代償と回復。失語症研究 16：22 - 29, 1996.